

# 軍艦島の春

浅山泰美

わだつみの深い青のただなかに  
睡る島がある

かつて 遠くから

人々が集い ともに暮し

栄えた 島

人呼んで

「軍艦島」

すべての住民が退去して

四十年余り

樹木のない島だったというが 今

朽ち果てた鉄筋コンクリートの壁と険しい崖の間に

人知れず

一本の桜の木が満開の刻を迎えている

幻影のようなこの風景を

いったい誰が見ているというのだろう

かつて

この島の住民たちは 春

舟をしたて

よその島に花見に出かけたという

何組もの家族の

若い父親と母親と子供たち

さぞかし賑やかな花見船であったことだろう

今はとおい昔のこと

何度ものコンクリート住居の屋上で

住民は草花を育てていた

そこにはどんな花が咲いていたのだろう

絶海の孤島の陽を浴びて

島で唯一の映画館の名は「昭和館」  
それは今 かろうじて建物の外側だけを残し  
遠い西陽を浴びている

小学校の名は「端島はしま小学校」

そこで学んでいた子の影が揺れる  
残された住居の壁に  
見おぼえのあるシールが貼られていた  
かつて

私のセルロイドの文具に貼られていたものと  
同じ時代のものだ  
子供たちは 皆どこへ行ったのだろう  
今でも 夢に

この島での記憶が  
潮風のように吹きこむことはあるのだろうか

彼らは知っているだろうか

誰もいないあの島で

一本の桜の木が

来年も また次の年の春も

花を咲かせつづけることを